人権作文集

ひかり 2021

第 33 集

公益社団法人大分県人権・部落差別解消教育研究協議会

この人権作文集「ひかり」という名前は、
日本最初の人権宣言と言われる水平社宣言の
「人の世に熱あれ、人間に光あれ。」
という言葉からとったものです。

まえがき　（児童生徒のみなさんへ）

この人権作文集「ひかり」は、県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の児童生徒のみなさんが、人権について、日ごろ思っていることや感じていることを作文として書いたものを集めて作りました。

本当にあったことをもとに、おかしいと思ったことや感じたこと、はらが立ったこと、そして、よくしていきたい、こうしていくべきだと思ったことが書かれています。

書いた人の多くは、自分からおかしいと思うことをかえていこうと行動しています。すぐにかわらないことでも、おかしいと声を出していくことをわすれてはならないと思います。

また、まわりのなかまからはげまされ、ささえられたことで、勇気を持つことができたり、安心できたりしたけいけんや、なかまとつながることの大切さをつづった作品も多くありました。この作文集を読んだみなさんもにたような体けんをしたり、感じたりすることがあると思います。

自分と同じ考えだと思ったり、ちがう考えだと思ったりすることもあるのではないでしょうか。**作品の中には、気になる言い方や考え方をしているものもあることでしょう。**そんな自分の考えを、友だちや先生・おうちの人と、たくさん話し合ってほしいです。

先生方へ

大分県人教の出版物では「『障害』」「なかま」という表記を用いていますが、本書では、できるだけ提出していただいたままの文言で表記することにしました。

題　名	校種	学年	なまえ	＊視点	ページ
ドッジボール	臼杵市　小学校	1	遠藤　羽流	なかま	1
みんなとなかよくなりたい	豊後高田市　小学校	1	板井　稜太郎	なかま	3
バリアフリーが安心をつくる	国東市　小学校	3	中嶋　香々彩	くらし・生きる	5
え顔をうばういじめ	日田市　小学校	3	奥村　彬	自分・家族	7
勇気をくれる友だちの言葉	中津市　小学校	4	柚木　葵衣	自分・家族	9
私の友だち	日出町　小学校	5	畠山　愛呼	なかま	11
自分の気持ちを大切に	宇佐市　小学校	5	乙咩　侑未	自分・家族	13
あの子は、すごい	豊後大野市　中学校	1	幡手　愛理	くらし・生きる	15
目に見えない障がい	臼杵市　中学校	1	大塚　寛之	差別・偏見	17
差別のない世界をつくる	宇佐市　中学校	1	中野　晄雅	自分・家族	19
いらない壁	別府市　高等学校	1	渡邊　星空	自分・家族	21
この世は生きづらい	玖珠郡　高等学校	2	秋好　冴香	くらし・生きる	23
無知からの差別	中津市　高等学校	2	S・M	差別・偏見	25
心の強い人	玖珠郡　高等学校	2	A・N	くらし・生きる	27
十人十色	日田市　高等学校	2	S・N	差別・偏見	29
新型コロナウイルスによる差別問題	宇佐市　高等学校	3	立石　真夕佳	差別・偏見	31
個性	豊後高田市　高等学校	3	匿名	くらし・生きる	33
光と闇の世界	竹田市　高等学校	3	M・Y	自分	35
差別や偏見はなくなるのか	宇佐市　高等学校	3	松永　星凪	差別・偏見	37
今までのＳｔｏｒｙを振り返って	部落解放同盟　大分県高校生友の会	3	山末　かんな	差別・偏見	39
当事者として考えたこと	中津市　高等学校	3	中村　彩花	自分	43
出会いと別れで学んだ今の自分	日田市　高等学校	4	武内　陸斗	くらし・生きる	45
親友Ｋ	中津市　高等学校	4	石丸　優莉	なかま	47

＊視点について
「自分・家族」「なかま」「くらし・生きる」「差別・偏見」の４つの視点で分類しました。

ドッジボール

臼杵市　小学校　一年

遠藤　羽流

ぼくは、ともだちとドッジボールをするのがすきです。やすみじかんは、いつもドッジをしています。

このまえ、六ねんせいのきょうしつに、みんなで、

「いっしょにあそんでください。」

と、おねがいにいきました。六ねんせいは、みんな大きくて、ドキドキしたけど、その日からいっしょにあそんでくれるようになって、とってもうれしかったです。

でも、このごろは、ドッジをするとき、すこしいやになることがあります。

あたったのに、がいやにでなかったり、ボールがせんからでていないのに、

「でたっ。」

ていったりします。ボールをもっていると、

「パスをちょうだい。おねがい。」

といわれるので、みんな六ねんせいのAくんにパスをします。たぶん、こわいからいうとおりにしているとおもいます。

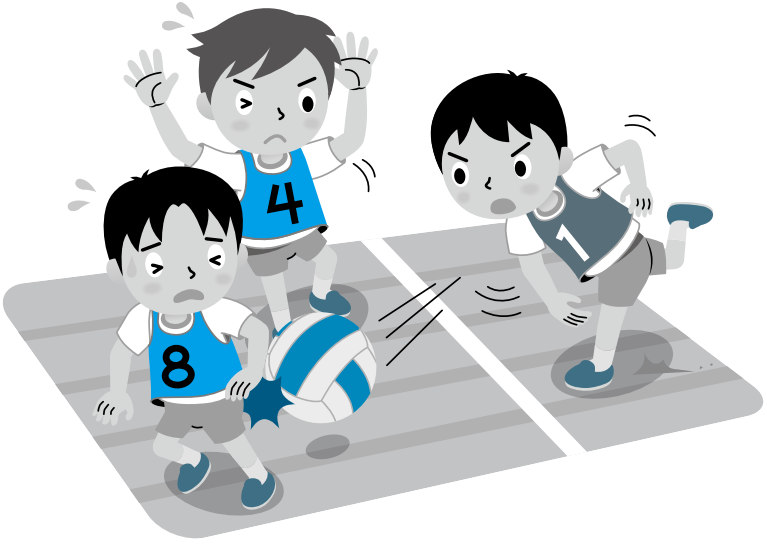
四ねんせいや三ねんせいもはいると、ほんきでなげて、ちからがつよいから、とれません。あたったらいたいし、くやしいです。六ねんせいと四ねんせいがたたかいになって、一ねんせいが、ボールをなげれなくなります。

でも、ぼくは、六ねんせいとあそびたいです。いっしょにあそんでくれるのは、うれしいです。いつもあそんでくれて、ありがとうございます。

でも、ほんきでなげないでね。

六ねんせいだから、やさしくやってね。

これからも、ドッジボールをして、いつもあそんでください。



みんなとなかよくなりたい

豊後高田市　小学校　一年
板井　稜太郎

休みじかんに、ぼくが、
「おにごっこをしたい。」
といったら、おともだちが、
「いやだ。」
といったので、ぼくは、かなしくなりました。でも、そのあとで、おともだちが、
「いっしょに、あそぼう。」
といってくれたので、こころの中があたたかくなりました。
おにごっこがはじまって、おともだちにタッチしたのに、
「タッチされてないよ。りょうちゃんがおにで。」
といわれたので、しかたなくぼくがおにになりました。

きょうしつにかえって、そのことをおともだちにいいました。でも、おともだちは、

「タッチされていない。」

ともんくをいってきて、いいあらそいになりました。せんせいがきてはなしをきいてくれました。すると、ちがうおともだちが、

「りょうちゃんばかりがおにになっていて、なんかへんだとおもっていた。」

といってくれました。

みんなではなしあって、タッチされたのにされていないといったり、じぶんかってにルールをかえたりしないというやくそくをしました。

ぼくもときどき、じぶんかってなことや人の気もちをかんがえないことをいったりしたりしてしまいます。このあいだも、ともだちのマスクのことを、

「ひよこみたい。」

とわらってしまいました。「いわれたおともだちの気もちをかんがえていなかったなあ。」とはんせいしました。

ぼくは、これからもおともだちとなかよくなりたいです。もっともっとなかよくなれるよう、おともだちの気もちをかんがえていきたいです。

バリアフリーが安心をつくる

国東市　小学校　三年

中嶋　香々彩

今年の夏休みは、バリアフリーについて調べてみました。『バリア』とは、「かべ・分けるもの」と、じ典に書いてありました。『フリー』は、「自由」と言う意味のほかに、「ない」という意味がありました。だから、『バリアフリー』とは、「かべがなく、どこでも自由にいけること」だと考えました。

「自分の身の回りで、『バリアフリー』になっているのは何かな」と考えてみました。すぐに、おばあちゃんの家の中が、頭の中にうかびました。おばあちゃんの家の中は、歩きやすいようにスロープがあります。ろう下と部屋とのだん差がありません。亡くなったひいおじいちゃんは、年をとってだんだんと歩きにくくなり、歩く時は、いつもゆっくりと動いていました。とくに、だん差がある所では、

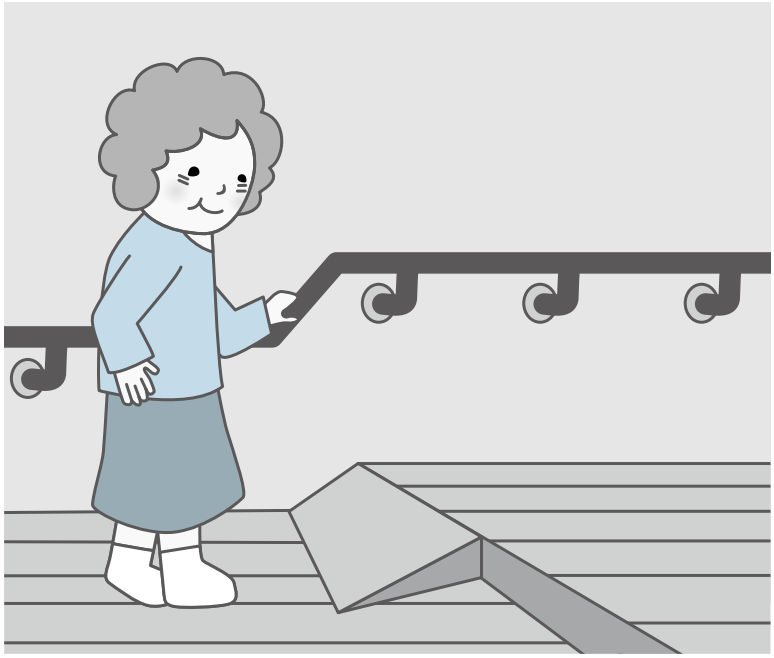
「あいた、あいた。」

と言って体をかたむけながら、かた足で体をささえて、もう一方の足をあげてこえていました。いつもこけそうで、見ていたおばあちゃんは、ひやひやしていたそうです。たった一歩なのに、とても時間がかかっ

ていたそうです。

そこで、おばあちゃんの家は、スロープやだん差のない家になりました。今では、おじいちゃんやおばあちゃんがつまずくことが少なく歩きやすそうです。私が遊びに行った時も、私も、何も気にしないで歩いています。お年よりの人だけでなく、子どもの私にも大人たちも、家族みんなにとってやさしく歩きやすいです。もちろん、車いすでも通りやすいように、ろう下のはばも広くなっています。おばあちゃんの家は、だれが来ても、いつでも、安心して動けます。動くことで、リハビリにもなるそうです。元気がでてくるのです。

『バリアフリー』って、だれにとっても、気持ちよく、楽しくすごせるものだと思いました。どんな場所にも、どの家にも、『バリアフリー』になれるようにしてほしいと思います。



え顔をうばういじめ

日田市　小学校　三年
奥村　彬

もし自分だけが友だちにいじめられていたらどうでしょうか。きっとだれでも、え顔をわすれてしまうでしょう。

ぼくは、サッカーのスポーツクラブで、ぼう言、ぼう力、いやがらせなどをされました。友だちときょうだいといっしょにサッカークラブに入ったはじめての練習の日の事です。ふつう通りの練習をしていたら、いきなりぼくのボールをむこうの方へとけとばされました。やった人は、集だんの中にいました。悪いという感じもなくわらっていて、とてもいやな気もちになりました。

その後、しあいの練習がはじまりました。いじめてきた人たちは、しあいの中でもずるをして点を決めていました。いっしょのチームの友だちもそのずるに気づいていましたが、他の人は、ほとんど気づいていないようでした。先生も気づいていないようでした。ぼくが思うには、先生がいないすきに、ずるをしたのだと思います。この事いがいにも、ぼう言を言われたり、ぼう力をふるわれたりもしました。

毎日の練習でそのような事がある中、がまんできずいじめている人に、

「やめろ。」

と言いました。でもいじめている人は、わらっていました。いやになり、通っていた水曜コースをやめて土曜コースにかえることにしました。その土曜コースの人は、やさしい人しかいませんでした。さべつも、ぼう言も、ぼう力もいやがらせもなくなりました。こうして、ふつうの練習をすることができるようになりました。

ぼくは、こういうけいけんをして、あらためて、ぼう力、ぼう言、いやがらせは、人からえ顔をうばう、ゆるされない事だと思いました。もし、ぼう力、ぼう言、いやがらせをされている人を見たら、それを止めて、え顔を取りもどす事ができるようにしたいです。そして、え顔をふやしていきたいです。

つぎ、またいじめられるような事があっても、はっきり相手に、

「やめて。」

と、言えるようにしたいです。

いじめはぜったいゆるされることではありません。

◇◇◇◇◇ 勇気をくれる友だちの言葉 ◇◇◇◇◇

中津市　小学校　四年

柚木　葵衣

体育の時間にとび箱のじゅんび運動で馬とびというのがあります。となりの人と交代に十回ずつとぶのです。でも私は、馬とびができません。私はとてもこわがりです。だからペアになったとなりのAさんにいつもめいわくをかけています。私が早く馬とびしないと、Aさんが次にとぶのにそこでとまってしまいます。

けど、Aさんはそんな私を気にせずこう言ってくれました。

「大丈夫、あおちゃんならできるよ。」

私はその言葉に少し勇気をもらいました。

その次の日、きのうAさんが言ってくれた事を思い出して、勇気を出してとんでみました。すると少しだけとぶ事ができました。するとAさんが

「きのうより、一歩進歩したよ、すごい。」

と笑顔で言ってくれました。私はうれしくてうれしくてたまりませんでした。

次の日、自信がついた私はなんだかとべる気がして、いきおいよくとんでみました。すると馬とびができたのです。そのしゅんかん、私はびっくりしました。すると、Aさんが自分のことのように喜んで、

「すごい、あおちゃんできたよ。」

と言ってくれたので、私はうれしいし、ほっとしました。

友だちの言葉は勇気をくれます。私のように何かが苦手な人は、Aさんのように明るくはげましてくれることで、自分の中にある勇気がわいてくるのだと実感しました。私もいろんな人を明るくはげましていこうと思います。

私の友だち

日出町　小学校　五年

畠山　愛呼

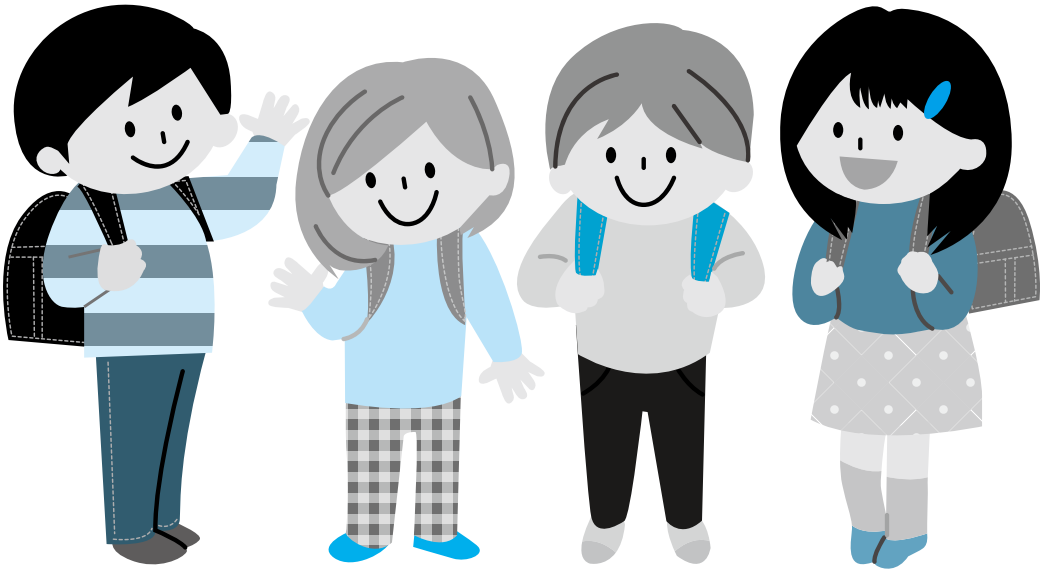
私には今、たくさんの楽しい友だちがいます。遊びにさそってくれる友だち。けがをした時に助けてくれる友だちなど優しい人ばかりです。

私は、みんなと違う保育園から入学しました。一人でいた私に、ある女の子が、話しかけてくれました。それがうれしくてすぐその女の子と友だちになりました。私は話しかけてくれたおかげで色々な子に話しかけて、すぐにみんなと仲良くなることができました。友だちがいなくてさみしく過ごしていた私が、自分から他の子に話しかけることができたのは、私のことを気にかけて声をかけてくれたその子のおかげだと思っています。

五年生になった私は、家や公園で遊ぶようになりました。それまでは、児童クラブで遊ぶことが多かったのですが、友だちと放課後や、休みの日に遊ぶようになってからとてもうれしく、とても楽しく過ごせています。

「いっしょに遊んだ友だちも楽しい気持ちになってくれるとうれしいなあ」と思います。私は下級生ともいっしょに遊びます。下級生にも私と同じように楽しい気持ちになってほしいと思います。私の方が上級生だけど下級生とも仲良くなりたいからです。私は友だちに上下はないと思っているので、みんなで仲良く遊びたいです。そして、「またいっしょに遊びたい。」と言ってくれるような自分になりたいと思っています。そのためには、自分で楽しむのと同時に、いっしょに遊ぶ友だちも楽しく過ごせるように相手の気持ちを考えながら行動することが大切だと思います。

私はこれからも友だちを大切にしたいと思っています。そして、初めて会う子にも自分から話しかけてみたいと思います。友だちがいなくてひとりでいた入学したばかりの自分の気持ちによりそってくれたあの子のように。



自分の気持ちを大切に

宇佐市　小学校　五年

乙咩　侑未

私は5年生のみんなと『ほんとの気持ちを』を学習しました。このお話ではルールいはんをした年子に幸夫たちが、

「ルールいはんだ。」

と言い、もうルールいはんをしていないのにまだ言い続けていました。その時に周りで、はやしたてた人やだまっていた人もいました。年子は周りで、はやしたてた人やだまっていた人に、ほんとはどう思っているのかを聞きたかったのです。

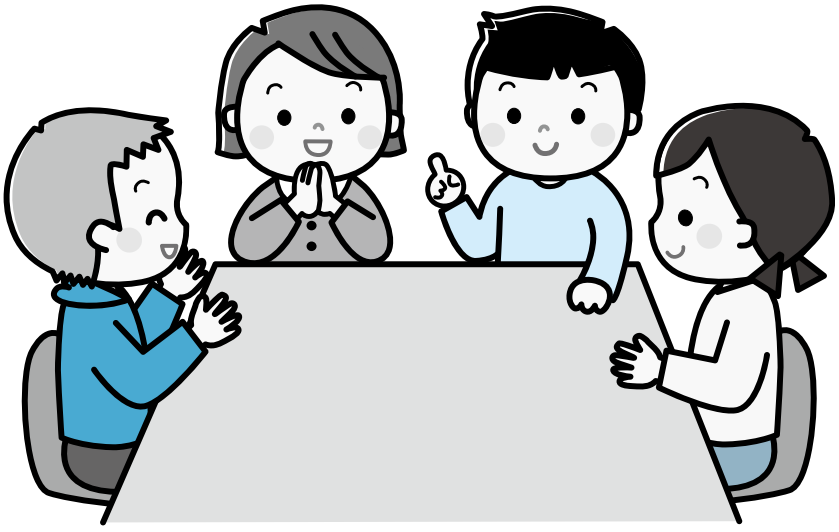
私が一番おかしいと思ったのは、その時にだまっていた人やはやしたてた人が後になって年子の味方についていたことです。特に、だまっていた人がおかしいと思いました。理由は、年子が言われている時は、何も言わないでただ見ていただけ「見て見ぬふり」をしていたからです。でも私は、だまっていた人の気持ちが分かるなとも思いました。私は、だまっていた人に似ていると思います。

二学期の学級レクで、宝探しをしようとしていた時に、みんなが好きかってにしていて、私は、「早く始めよう。時間がなくなるよ。」と言いたかったけど、言えませんでした。その後のレクのふんい気が暗くなると思ったし、もし何か言われて、けんかになったらいやだなと思ったからです。

『ほんとの気持ちを』をみんなで学習した時に先生が、

「みんなだったら自分のクラスの友だちに本当の気持ちを言えますか。」

と聞きました。私は「言いたいけど言えないという気持ちと、言ったらけんかになりそう」という気持ちが半分半分でした。クラスの友だちは、言えるという人と言えないという人に分かれていました。言えるという人の意見で特によかったのが、「言わないと解決しない。言ったらすっきりする。」という意見です。また、「言わないと何も伝わらない。」という意見も心に残りました。その友だちの考えを聞いて「できるだけ自分の考えを口に出して友だちに伝えたいな。」と思いました。みんなで考えを伝え合うと、もっとクラスが、いいふんい気になると思いました。そして、私も友だちの考えをきちんと受けとめたいです。



あの子は、すごい

豊後大野市　中学校　一年

幡手　愛理

私が障害というもので人々が差別を受けることがあると知ったのは、小学五年生のときでした。私の小学校にゲストティーチャーとして来た人は、目や耳にハンデがありました。「なんか、かわいそう。」それがその人の第一印象でした。

ある日の授業で、私はその子から大切なことを教わりました。

「私は、目と耳が悪くて、小学校のころから気持ち悪がられていました。でも、学校の先生が『やれることをやってみるといい。』と言ってくれたので、今でもその言葉を大切にしています。」

と。そしてその人は歌を歌い始めました。すごく上手できれいな歌声でした。その歌声を聞いて、ハンデのあるなしに関係なく、私にはその人がとても輝いて見えました。

実は、私も一度だけ耳を悪くしたことがあります。その時は、運動をしないほうがいいと言われていたので、体育の授業を見学していました。みんなが楽しそうに体育をする姿を見て、どこか置いて行かれたような、とても不安な気持ちになりました。その瞬間、ハンデを持つ人たちの気持ちが、ほんの少しだけわかったような気がしました。ハンデを持っているという理由だけで、こんな気持ちを毎日感じているかもしれないのに、思いっきり歌を歌う姿に感動しました。

そして、その人の姿や話から分かったことは、ハンデを持つ人に「かわいそう。」と言ったり思ったりすることは、とても失礼だということです。私も耳が悪かったときに、絶対言われたくない言葉が「かわいそう」でした。「早く耳を治そう。」という前向きな気持ちでいた私に、かわいそうという憐みの言葉を掛けられると、まる

で自分がダメになったように感じたことがありました。

言葉には、人を優しい気持ちにする力もあれば、つらい気持ちにさせる力もあります。そんなの当然だと思うかもしれませんが、気付かないうちに誰かを言葉で傷つけているかもしれません。

「君たちが死んでしまったときのことを想像してみて。家族が悲しむ、友だちも悲しむということを忘れないでね。」

一人ひとりの命がかけがえのないものであることを知っている、その人の言葉です。

「もしも、生きていることが嫌になったら、私の言葉を思い出してね。」

この言葉を聞いて、わたしも彼女のように強くてかっこいい人になりたいと感じました。

今は昔に比べて、差別が少なくなったように思います。しかし、ハンデを持った人々への差別が今も続いていることは事実です。私は、差別をなくすための第一歩として、一人ひとりが命の大切さに気付き、差別をなくすための行動をすることが大事だと思います。そうして、ハンデを持っていても、持っていなくても、だれもが輝けるような明るい未来を創りたいです。

「困っている人を見つけたら、声をかけて相談にのる」これが私なりの差別をなくすためにできる行動です。

目に見えない障がい

臼杵市　中学校　一年
大塚　寛之

みなさんは「シンデレラ」と言うことができますか。ぼくは、小学校に入学してまもないころまで、言うことができませんでした。相手にきちんとしゃべって伝えることができなかったということです。ぼくは生まれつきカツゼツが悪く、幼稚園児の時から小学校低学年まで、カツゼツがよくなる訓練を病院でしていました。また、ぼくは生まれつき体の使い方にも障がいがあり、それは字を書くことが苦手な障がいです。でも、字が書けない障がいとわかったのは、ぼくが小学校五年生の時です。それまでは、ぼくもお母さんも、なぜ書くことができないのか、とても悩み、苦労しました。

ぼくは、人権侵害とは、目に見えることでしてしまうものと、目に見えないことで気づかずにしてしまうものがあると思います。例えば、背の低い人に「ちび」と言う。太っている人に「デブ」と言う。それは目に見えることで起こったものです。でも、ぼくのように字を書くことが苦手な人が、一生けん命書いたとしても、それは目に見えないので、知らない人には「なまけて書いている」「いい加減に書いている」ように見えます。実際、ぼくも、何度も「もっときれいに書きなさい」と言われ、苦しい思いをしました。字をきれいに書くこと、枠の中に書けることが「普通」と思われる。それが出来ないと、「ふざけている」「字が汚い」とバカにされる。それが目に見えないことに対して起こる人権侵害だとぼくは思うのです。

小学生の時、カツゼツが悪いことで何度もからかわれました。からかっている人は、軽い気持ちだったのかもしれません。しかしからかわれていたぼくは、ずっと訓練を受け、相手に伝わるように努力していたのです。背の低い人に、「背が高くなれ」というのは無理なことです。それと同じように、障がいのあるぼくに、「字をき

れいに書け」「わかるようにしゃべれ」は無理なことなのです。だからみなさん、どうか相手が自分と違ったとき、それをからかったり、変な目で見たりせずに、まずは「どうしてそうなのかなー」と考えてください。理由がわかれば、相手を思いやり、寄りそうことができると思います。そうすれば、障がいのあるぼくと同じような人が、今よりももっと暮らしやすい世の中になると思います。

繰り返しになりますが、車いすの人は、一目見れば障がいがあるとわかります。しかし、ぼくのように目には見えない障がいのある人間もいます。そしてもちろん障がいのあるなしにかかわらず、どちらにも同じ人権があります。憲法十四条で「すべての国民は法の下に平等。差別されない。」と定められていると習いました。だからみなさん、どうか、人を見た目だけで判断したり決めつけたりするのはやめませんか。相手の立場や気持ちを考えて発言しませんか。

ぼくが中学校でたくさん勉強できるように、様々な配慮をしてもらっています。例えば、中学校で一番不安だった定期テストの解答用紙は拡大してもらいました。おかげで、テストでは、書けなかった字、読み取れなかった字での×や減点は少なくなりました。また、毎日ノートでの日記や自主学習のけい線も、二行で一行分書いてよいとしてくれています。そのことでやる気が出て、毎日忘れず出せています。そのおかげで、今ぼくは、毎日楽しく学校生活を送っています。

差別のない世界をつくる

宇佐市　中学校　一年
中野　晄雅

僕は、小学校三年生から六年生の時に、クラスの一部の人たちから「頭がでかい」「ゴリラ」「がうこ」（「がうこ」は自分の名前を逆から読んだあだ名）などの悪口やあだ名を言われていました。言われている時、「なぜこんなことを言うのか、なぜ人の気持ちを考えずにそんな発言をするのか」と思うことがありました。「親やばあば、じいじ、いろいろな人が一生懸命考えてつけてくれた名前なのに、なぜそんなことをお構いなしに発言するのか」と怒りがわいてきました。このことを親に言おうとしましたが、親に迷惑がかかると思い、伝えることができませんでした。

僕は六年生の時、先生に相談をして悪口を言う人たちに注意してもらったけど、特定の人はやめてくれず、とても嫌になり学校に行きたくないと思うこともありました。嫌な気持ちはありましたが、学校を休むと親に心配をさせてしまうと思って、我慢して学校に行くようになりました。

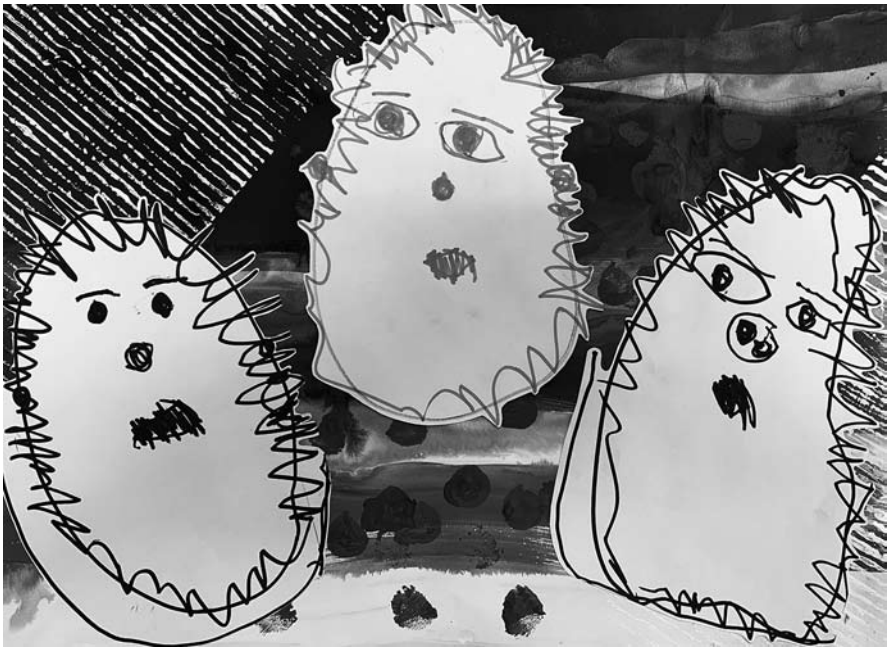
中学生になり、入学して間もなくコロナの影響で学校が休みになりました。家でテレビを見ていると、「コロナ」という名前の外国人の男の子がその名前のせいでひどい差別を受けているのを知りました。小学校の時のことを思い出し、僕と同じように名前を理由にされて、差別されていることに怒りがわいてきました。なぜ人は、他人の名前を面白がって変えて言ったり、動物の名前に例えて言ったりするのだろうと再び考えるようになりました。

悪口や差別は、学校だけではありません。ネットでの誹謗中傷を受けて自殺するニュースを目にします。子どもだけではなく、大人も同じように悪口や差別をしてい

るのだろうと思います。大人が子どもにお手本を見せなければならないのにと残念な気持ちになりました。

「差別のない世界をつくる」僕は心からそう思っています。そのためにまず、僕ができることは、困っている人の悩みを聞いて、一緒に解決に向けて努力してあげることだと思います。学校では友だちの話を聞き、大人になれば会社の同僚の話を聞く。話を聞いて一緒に悩むことは子どもでも大人でもできると思います。

また、僕は小学校の時、困っていても友だちに相談することができずに、心の中に嫌な気持ちをしまい込んでいました。そして一人で気持ちを切り替えて楽しく過ごすことを心掛けて生活していました。そんな体験から、これからは、困っている人に気づける人になりたいし、話を聞いて、一緒に解決に向けて努力できる人になりたいと思います。



いらない壁

別府市　高等学校　一年

渡邊　星空

私は、障がい者に対する意識について書こうと思う。

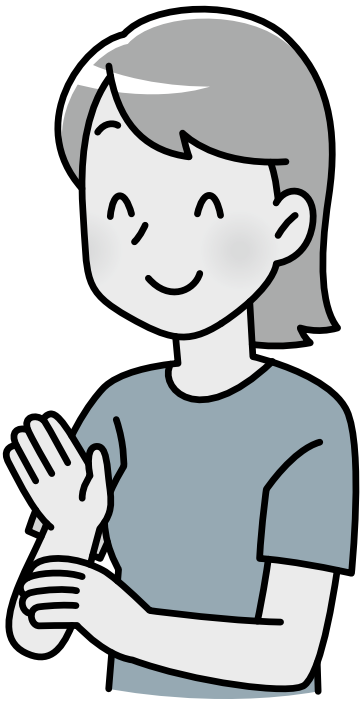
私の祖父母は、生まれたときから耳が聞こえない。だから私が祖父や祖母と話すときは、手話という両方の手を使って会話するのが、小さい頃から当たり前だった。その頃の私は、手話を使うのが日常だったこともあり、他の人の祖父母が声を出して話をしているのには、少し違和感があった。

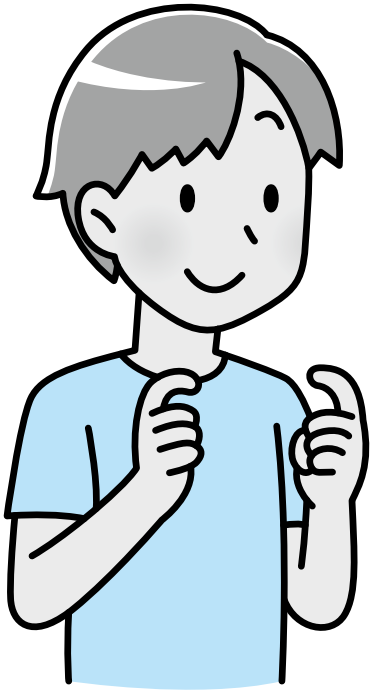
つい最近、祖父母が昼食をドライブスルーで買ってくれたことがあった。もちろん、話せないので注文するのは私だったが、会計をするときに店員は、大人である祖父母に話しかけた。店員の言うことを私が聞いて手話で祖父母に伝えられたので、ちゃんと買うことができた。このとき対応してくれた店員は、祖父母が話せないと分かったときでも、嫌な顔一つせずに会話を進めてくれた。

祖父母の立場になって考えてみると、私が思っている以上に辛いのではないかと思う。あのときは、私がいたからよかったが、祖父母が二人で買い物をするときはどうしているのだろう。会話がうまく伝わっているのだろうかなどいろいろ考えた。そう思うと、あのときの店員のように、嫌な顔一つせずに対応してくれる人が、祖父母たちにとっては心強い存在になるのだろうと思った。私の祖母は、特に嫌なことなどあるのだろうかと思うくらい、いつも笑顔でとても優しい。実際に、私も完璧に手話ができているわけではないので、十分に手話が伝わらないときがある。そういうときでも、私が分かるまでゆっくりと、話したいことを笑顔で伝えてくれる。それがばかりか私に新しい手話を楽しそうに教えてくれるのだ。私は、このような祖母をとても尊敬している。

障がい者と聞くと、それぞれ違ったイメージを持つと

思うが、私は「障がい者」という呼び方があまり好きではない。ただ体の一部分が不自由なだけで、生活に支障が生じるのかそうではないのかは、周りの人の行動で決まると思う。例えば、体が不自由な人を見かけたら、何かお困りはありませんかと声かけすることが当たり前になれば、今よりもっと安心して生活ができると思う。声かけするのは勇気がいることもある。そのときは、あの店員のように、優しい視線を送れば、それだけでも十分、障がい者は外に出やすくなるのではないかと思う。このようなことから、私は、障がい者という壁を少しずつなくし、祖父母のような人がもっと安心して、笑顔で普段通りの生活ができることを願っている。





この世は生きづらい

玖珠郡　高等学校　二年
秋好　冴香

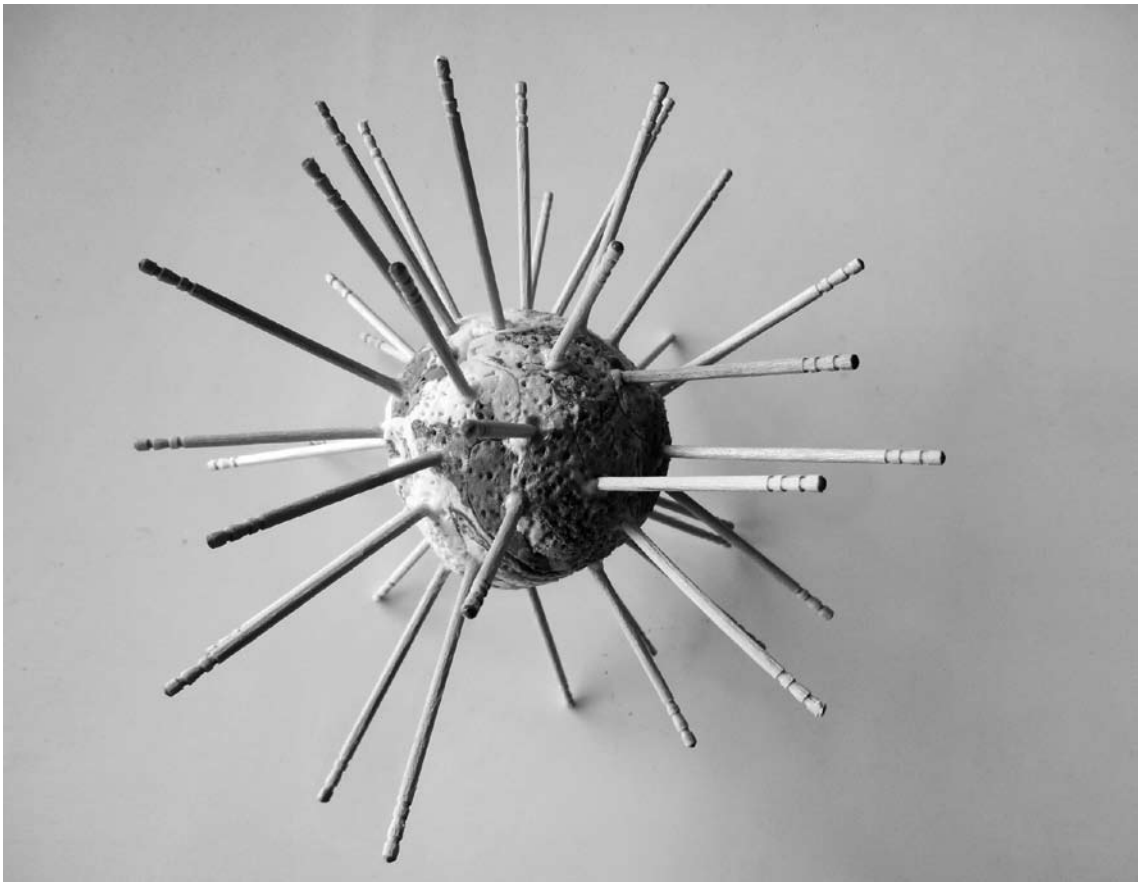
この世は、ものすごく生きづらい。それは差別や偏見がいつまでたっても消えないからである。

私たちの生きる社会は、多数決という制度が頻繁に使われるように、人数が多い方を良しとする傾向が強い。必ずしもそれが悪いというわけではない。しかし、その考え方によって、生きづらい人々が少なからずいるということを忘れてはならない。

その例として性の多様性があげられる。世間で、「異性を好きになる人」が大部分であるため、いつのまにか人々はそれが正しいと勘違いをし、そうでない人々を奇異の目で見たりするのだ。すごくすごく生きづらい世の中だ。私は生まれつき左利きで、右利きが大部分を占めるこの社会で何度も不自由な思いをしてきた。それは、社会が、そもそも「右利き」に合うように作られているからだ。それと同じように性には多様性があるにも関わらず、人々は、少数派の人々を受け入れることを拒む。ある国会議員が、「ＬＧＢＴは生産性がない」と発言した。また日本では同性同士の結婚が認められていない。いつまでたっても受け入れられず苦しむ人がいる。

また、差別や偏見を恐れ告白できない人が沢山いる。「少数派の意見を尊重しなければならない」と口では言うが、この生きづらい社会でそれが実現されているとは

到底思えない。私は、少数派、多数派に関係なく、皆が生きやすい社会づくりりに貢献したいと思う。



無知からの差別

中津市　高等学校　二年
S・M

先日、私が通っている学校に部落差別について講演してくれる方が来てくださいました。その方も部落と呼ばれる地域出身で、今までの経験や部落差別をなくす活動をしていく中で起こったことをすべて話してくださいました。

その話の中で、最も印象に残ったことは、部落差別は私たちの身近で今も起こっているということでした。私は今までなんども同和問題について学習してきたけれど、現在の日本でそのような差別はなくなってきていると思っていたからです。講演をしてくれた方が見せてくれたのは、ネット掲示板でした。その中には、純粋な質問が、適当で偏見のある回答で解決されていました。偏見や差別意識のある回答への「いいね」の数は多く、正しいものや差別に対して反対する意見はその逆で結局、質問者は間違った答えを信じているようでした。

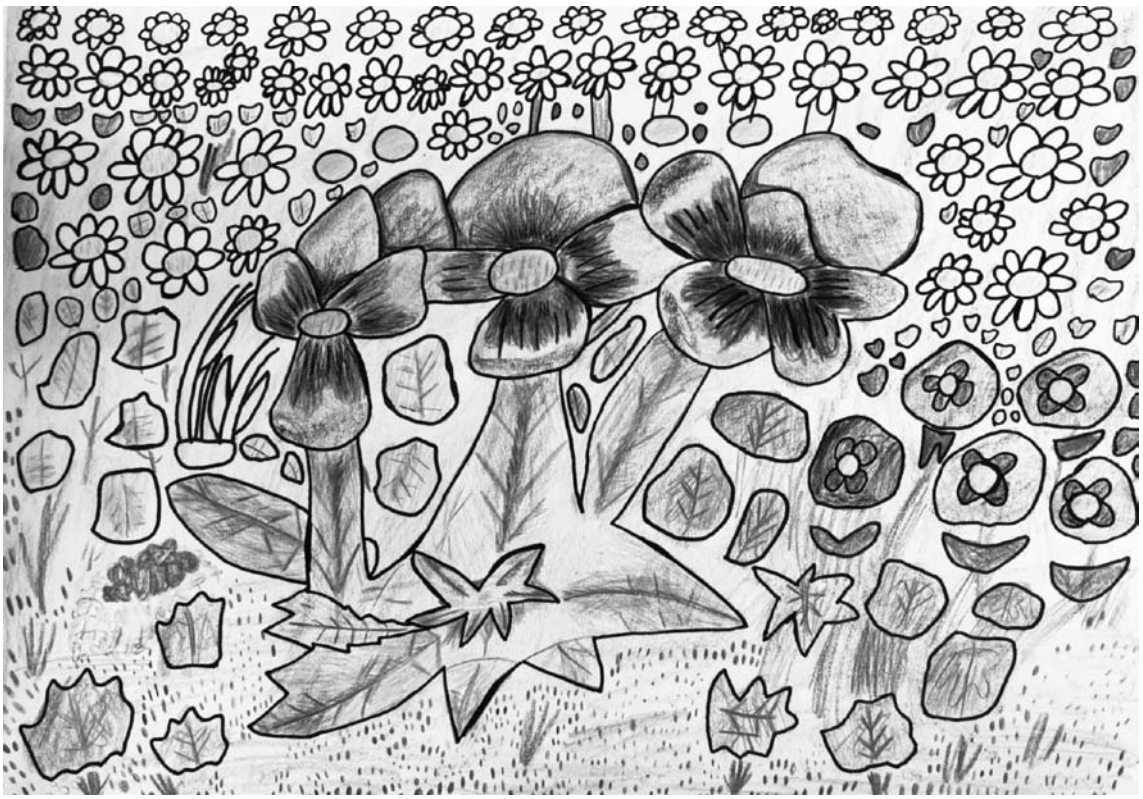
私はこれまでは、部落差別は昔からの言い伝えで存在しているのだと思っていました。しかし、一度耳にしたことや、自分にとって非日常的なことに興味を持って面白がっている人間と、その人間の興味に合わせて情報が優先されるインターネットによって、新たな差別の方法が生まれていることを知り、とても怖くなりました。

講演をしてくれた方は、差別は無知から始まることを教えてくれました。例として、部落出身者の名簿になっている本をフリマアプリで売って、逮捕された人がいるという話を聞きました。

私もこの講演会を通して部落差別についてきちんと理解できていなかったら、気づかないうちに自分も差別してしまっていたかもしれません。興味本位ではなく、正しい情報を知ることが大切なのだと、改めて感じました。

今では、部落差別以外の差別もネット上で行われてい

ます。ささいな興味や好奇心で決めつけてしまわず、正しい知識を得るためにも、ネットに頼らない方が良いと思いました。みんなが正しく学んで、本当に差別のない世の中になることを心から願っています。



心の強い人

玖珠郡　高等学校　二年
A・N

私は、何かと人の目や周りの人からの評価を気にしてしまうことが多い。

中学生の時に、周りから「ちょっと浮いてるよね。」と言われている友だちがいた。私はその子と仲が良かったので、周りから浮いているなんて思ったことがなかった。でも、他の友だちが愚痴を言っている時、その子の話が出てくることで、日に日に「その子みたいにならないようにしなきゃ」という気持ちが出てきた。自分が愚痴を言われているわけでもないのに、私はその子と一緒にされたくないと思ってしまった。それから、私はその子と少し距離を置くようになっていた。本当はその子とずっと仲良くしたいと思っているのに、反対のことをしている自分が嫌いだった。そんなとき、私が読んでいた漫画の登場人物の台詞を思い出した。それは、「自分が思っているより周りは自分のことなんて見てない。人の目ばかり気にしていてもしょうがないでしょ。」という言葉だ。この言葉を思い出して、心のもやもやがすっきり晴れて、救われたような気がした。私が気にしていたことは本当に小さなことだったのだ。こんなことで、友達と距離を置いていたなんてばかばかしいと思った。

この経験から、私は周りの人の目なんて気にせずに堂々と自分を出せる人になりたいと思った。急に変わるのは難しいことだけれども、まずは自分に自信を持つことから始めようと思う。そうすることで、自然と周りの目を気にせずに過ごせるはずだ。私以外にも、同じ悩みを抱えている人は多いと思う。私はそんな人に、あの漫

画の登場人物が言っていた言葉をかけてあげられるような心の強い人になりたい。

十人十色

日田市　高等学校　二年
S・N

皆さんは人種差別について考えたことがありますか？もしかしたらあまり身近な話ではないからと思っている人が多いのかもしれません。しかし、私は人一倍人種差別に対しての気持ちが強いです。

私は母がフィリピン人、父が日本人のハーフとしてフィリピンで生まれました。ハーフという呼び方自体、一種の人種差別かも知れませんが、日本ではこの呼び方なのであえて「ハーフ」という表現を使います。

私は保育園の時から、ハーフであるという理由でなかまはずれにされるときがありました。

小学生の時、友だちから「○○ちゃん肌やけちょると？ハーフだから？」と言われたことがあります。その時はまだよく理解できていなかったのですが、ハーフを理由に言われるのが悲しかったことを覚えています。私が「なんで？」と聞くと「そんなイメージがあるから」とその友だちは言いました。〝イメージ？〟それを聞いてハーフというだけで特別視されているのがとても嫌でした。

中学生のとき、私は父の仕事の関係でタイへ引っ越し、タイの日本人学校へ通うことになりました。タイでは首都バンコクに住んでいたので、街を歩くと色んな国の人が歩いていました。色んな文化や宗教にも触れることが出来、良い経験となりました。しかし、そこでも人種差別を見たことがあります。大きなショッピングモールのエスカレーターで白人男性が黒人男性を追い抜く際、わざとらしくぶつかり、少し笑いながら黒人男性を見ていました。その場には私と友だちしかおらず、その初めての光景に驚き、まだまだ黒人差別があるんだなあとショックに感じました。

中学3年生のとき、日本人学校で同じクラスになった女の子は、タイ人と日本人のハーフの子でした。その子

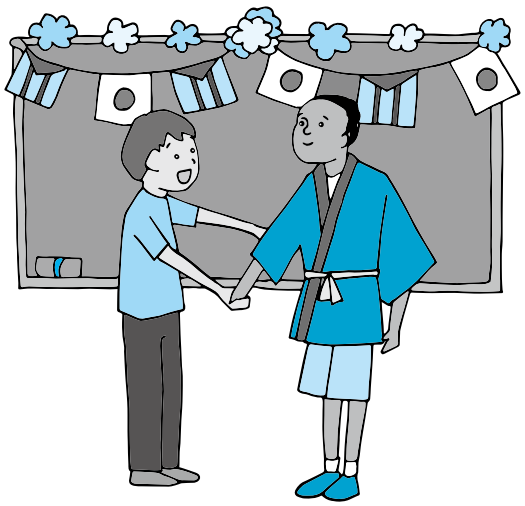
が「私ね、ハーフだからって無視されたり、冷たくされたりしたんだよね」と言いました。私が「どうして?」と聞くと「私も良くわからない。でも日本人学校に小学生から通っている子はみんな経験してると思う」と聞きとてもびっくりしました。私が小学生のとき経験した事とどこか似ている部分があると思いました。共通点は、ハーフへのイメージではないかと思いました。ハーフというだけで周りから特別視されます。

みなさんにとってハーフはどのようなイメージがありますか?見た目が違いますか?自分と違いますか?私は、ハーフではなく、同じ国にいて同じ言葉を話す仲間として、人それぞれ個性を持った人間として受け入れてほしいと思いました。

私の母も、日本で働く職場で漢字が読めない、書けないという理由で言葉の暴力を受けたと聞きました。

ハーフだから日本人ではないからと、少し周りと違うからだけでたくさんの人が知らぬ間に差別をしています。本人たちが気づいていなくても、周りがやっているからと同じ事をすれば、していることは一緒です。

人種差別、黒人差別がこんなにも身近で起こっています。言葉だけでも人種差別という暴力です。私はコロナウイルスによってどこにも行けないこの時間を使って、改めて人種差別について考えるべきだと思います。私は多種多様な人がいるこの地球が好きです。みんなそれぞれの個性を持っています。周りと違うからで無く、個性だからと受け入れていく環境を私たちがこれから作っていくべきと思いました。十人十色、人それぞれ。みんなで手をとり合って受け入れていく世界はそう遠くない未来だと私は思っています。



新型コロナウイルスによる差別問題

宇佐市　高等学校　三年
立石　真夕佳

現在、新型コロナウイルスの感染拡大により、感染者のみならず、その家族や、最前線でウイルスと闘う医療従事者などに対する差別が社会問題化しています。

去年の二月頃、私たちは、当時一番感染者が多かった北海道へ修学旅行に行きました。感染対策を各々がしっかり行ったため、全員健康なまま、学校へ戻ってくることができました。しかし、高校付近の人達からすれ違いざまに距離を取られるなどといったことがありました。

ニュースでは、新型コロナウイルスに感染したことで、自宅まで特定されて貼り紙をされたり、その人の子どもへもいじめが起きて、感染した方が自殺したという報道も見られました。また、病院で必死に働く医療従事者への差別の実態、保育士の悲痛を聞くことが、短期間の中で多かったです。

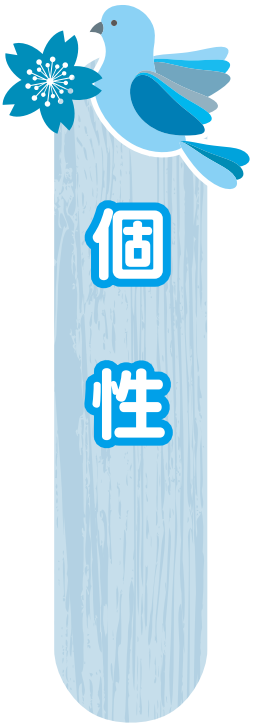
誰もが「感染したくない」と思うからこそ、ついつい感染者を遠ざけたり、差別をしてしまったりする可能性があるし、私も身近な人が感染したら無意識に距離を取ってしまう気がします。

しかし、自分が感染者になってしまった時、誰も手をさしのべてくれず、それどころか差別を受けることを想像すると、とても怖いです。

私は、コロナ差別が生まれた背景には、「正しい知識を持っていないこと」があると思います。恐れるべきはウイルスであって、人ではないということを、一人ひとりが理解することが大切で、それがコロナ差別をなくす第一歩になると考えます。

それと同時に、自分の危険を顧みず、患者の治療と感染拡大の防止に奮闘している医療従事者に対する感謝の気持ちが大切だと思います。

私は将来、看護師になるために、日々の学習に取り組んでいます。私が看護師として働くときも、また違う感染症など、危険が多くあると思います。私も現在、コロナウイルスと闘いながら医療を支える看護師のように、強い看護師になりたいです。



個性

豊後高田市　高等学校　三年
匿　名

私はどちらかと言うと一人でいる時間のほうが好きです。でも、だからと言って誰とも話さないわけではなく、いつも一緒にいなくても話したり相談したりする友だちはいます。だから、小学生の時に先生に

「友だちがいるのか？」

と聞かれて驚きました。

「いつも一人でいる方が多いから、あまり笑わないから」

と言われ、私は少し苛立ちました。一人でいる方が楽なのに、おもしろいと思わないから笑わないのに、何でそんなふうにとらえるのだろうと。

私は、『普通』（多数の中の標準）を人に求めるのは差別だと思います。差別と言ったら、見た目や国籍などを考える人が多いと思うけれど、その人の『個性』を認めないのも差別だと思います。先生はただ心配してくれただけかもしれないけれど、私は、ひとりでいるから友だちがいないと決めつけられたみたいで悲しかったです。

私は今でも一人でいることの方が多いけれど、ちゃんと友達はいます。私のクラスには割と個性的な人が多いけれど、「あの人はそういうキャラだから」と納得している感じで、私にはそれが相手の個性を認めているように思えます。

私は、社会に様々な個性の人がいるのは当たり前だと

思っています。だから、「あの人は変わっている」という風に勝手に自分の中で決めつけたりしないで、それがその人の個性なんだと認めて、しっかり理解できる人間になりたいです。

光と闇の世界

竹田市　高等学校　三年

M・Y

皆さんは子どもへの虐待やイジメについてどう思いますか。

私も実は虐待やイジメを受けてきました。

私は5歳の頃、毎日「叩く、蹴る、殴る」は勿論、満足な食事も出来ず、全くと言っていいほど母親の手料理を食べたことがありません。それに、包丁を振り下ろす寸前で止められたり、公園で散々暴力をされた後、大人用の自転車を振り上げ、それを勢いよく私の体に叩きつけたりして母親は帰って行きました。私は毎日泣き、骨が軋み全身の筋肉が悲鳴を上げていました。私は五歳で親元を離れ、施設に入り、今は里親さんの所でお世話になっています。

皆さん想像してみてください。もし自分が、大好きな母親から暴力を受け、食事も出来ず、手料理すら食べられず、これから物心がつくであろう幼い自分が、親に捨てられたらどういう気持ちになるでしょうか。私はこの「虐待」を受けて「辛い、苦しい、助けて、憎い、もう生きたくない」と思っていました。そして、今になってあの頃の自分を思い出すと、共感できる、あるアニメキャラクターの言葉があります。それは、『どん底を知っているか？其処は光の差さぬ無間の深淵だ。有るのは汚泥・腐臭・自己憐憫。遥か上方の穴から時折人が覗き込むが誰もお前に気付かない。ひと呼吸毎に惨めさが肺を灼く。』もう一つが『誰にも貢献せず、誰にも頼られず、泥虫のように怯え、隠れて、生きるのが如何いう事か。』

この言葉は辛く苦しく生きてきた闇の世界に産まれた者だからこそ言える台詞だと思います。まさに私の人生もどん底。光を求めても、光の世界に生きる希望を求めてもその手は届かない。誰も助けてはくれない。辛さや苦しみからは逃れられない。

私は虐待の他に、幼稚園の年長から中学三年生までずっとイジメを受けてきました。自分の人生を振り返ると「自分は生きていて良いのだろうか。自分には生きる価値があるのだろうか。生きるのが辛い。人生を辞めたい。」とさえ思います。そう思う自分でも納得が出来る言葉もあります。一つ目は、『恥の多い生涯を送ってきました。自分には、人間の生活というものが、見当つかないのです。』二つ目は、『いまは自分には、幸福も不幸

もありません。ただ、一斉は過ぎて往きます。』この言葉は昭和の文豪「太宰治」によるもので、この言葉や、アニメキャラクターの言葉をみると自分も一緒だなと感じます。

今一番問題になっている「幼児虐待」と「学校でのイジメ」。解決したくても解決し難いこの世の中で私たちはどのようにしていかなくてはならないのか。まず第一に「止める」こと。理由は、虐待やイジメを受けていても、誰一人止めてくれたり、助けてはもらえなかったからです。第二に「イジメや虐待を受けている人の相談を受けたり、力になることをする。」もし、他の人に脅かされても気にすることはありません。自分が正しいと思うことは進んで行っても良いのです。何も悪くありません。皆さんにも色々な意見や考えがあると思います。中には私のように虐待やイジメを受けてきた人もいるでしょうし、逆に親に大切に育てられた人もいることでしょう。

私は、お世話になっている里親さんからある言葉を掛けてもらいました。それは、

「自分が辛い思いをした分、幸せになりなさい。」

この言葉を聞いたとき、自分は生きてて良いのだなと思い、初めて人から温かい言葉を掛けられたのでとても嬉しくて、今でも里親さんに感謝しています。そして最後に伝えたいことがあります。一つ目は、大切に育ててくれた親に感謝して下さい。二つ目は、どんなに親が憎く嫌でも、親は私達より多くの人生を経験しています し、親には色々な考えがあり、子どもの将来を見守る義務があります。反抗をしてしまうのは分かりますが、親の本当の気持ちを探ってみてください。三つ目は、親に愛情を注がれて育てられたなら、人の助けや力になれる優しい人になってください。少し理解し難い所もあると思いますが、光の世界に産まれた人なら出来ることですし、闇の世界に産まれた人なら尚更、人を大切にしなくてはなりません。そして、自分達が親の立場になった時、虐待をしないようにすることと、子どもに「イジメをしてはならない」という正しい教育をして、優しく美しい心をもつ子どもになるように気を付けて、これからの人生をよく考えて過ごしていくことが大切です。そして、皆さんの周りで、辛い思いや、苦しんでいる人達にそっと手をさしのべてあげてください。その時、里親さんが私に掛けてくれたように「自分が辛かった分、幸せになりなさい」と言ってみてください。その言葉できっとその人は新しい人生を切り開くことができます。

――もうこれ以上闇の世界に産まれる子どもたちが増えませんように・・・

差別や偏見はなくなるのか

宇佐市　高等学校　三年

松永　星凪

私が高校二年生のとき、仲の良い友人と四人で話していたときに、二人の友人が障がい者を馬鹿にしているかのように障がい者のマネをした。最初は、もう高校生なのにまだこんなことをする人がいるのかと、心の底からあきれたし、とても腹が立った。その二人は面白そうにマネをしていたが、私は、

「何が面白いのかが分からない。よく笑えるね。」

と言ったことを覚えている。その時一緒にいたもう一人の友人とこの出来事について話をした。その友人には妹がいて、障がいをもっている子だった。私は過去にその子と友人と三人で談笑したりすることがあった。とても明るくて障がいなどを感じることがないくらいの子だった。その妹がいる友人は

「私に障がいを持った妹がいることを知らないのかな？でも友人二人には話をした記憶がある。」

と辛そうな顔で言っていた。私はその子を知っているし、マネをした友人二人とはよく遊ぶ仲だった。どちらも大好きな友人だからこそ

「なぜそんなことを言ったのか。」

と腹を立てて言うことができたが、これを他人がしていたとすると、「障がい者を馬鹿にしたり差別などをするな。」と今の私では言えないなと思った。友人二人のことは信頼しているから腹を立てて言えた。そこで仲が悪くなったとしても、一人の友人として一緒にいたいと思わないからだ。

差別や偏見はいつの時代も終わることはないと思う。小学校の頃から今に至るまで、一定の人がそういった思想を持っていることを知ったからだ。友人二人がしてい

たそのマネはクラスの人も面白そうにしていたということを後から知った。この大きな間違いを指摘する人がいなければ差別や偏見はなくならない。ひとり一人が違う人間だから考えは違うと思う。しかし、それを間違った方へ向かっていると気づいたときは、気づかせる事が大切だと私は思う。

今までのstoryを振り返って

部落解放同盟　大分県高校生友の会　三年

山末　かんな

一年目（中学一年生）
　U先生が家に来て、お話をしたのち**学習会（補足一参照）**がスタートしました!!
　その時の生徒は、男子が四人で女子がなんと私一人だけでした。だから、学習会に行くかは結構悩んだ思い出があります。
　初の**県奨（補足二参照）**では盲腸にかかり、退院をしていたのに行かせてもらえませんでした。
　また、イヤイヤ期（＝めんどくさい）が多少あり、友の会にあまり行かずに一年修了しました。

二年目（中学二年生）
　U先生からN先生に変わり、二年目がスタートしました!!
　なんと、メンバーが一人になってしまいました。自分だけとか。あの時は大人の方が多かったことを覚えています。なんとか初の県奨に行けたけど、全然楽しく過ごせませんでした。宇佐支部が私だけだったので、人見知りが発動してしまいました。
　また、中学校の人権集会「仲間の集い」で学習会に発表する時の旗作りがスタートした時は、ここだけの話ですが絵はなぞったけど、色塗りは地球の九州の部分のみを塗ってほとんど先生が塗っていたのが懐かしいです。
　そして、まだイヤイヤ期がありました。でも、学習会には先生が家に迎えに来てくれていたから、行かんといけないみたいな感じで、毎回用事がないときは行きました。**友の会（補足三参照）**はほぼ休んでいました。

三年目（中学三年生）
　N先生からH先生に変わり、三年目がスタートしました!!
　なんということでしょう!中学の最後の学習会でお母さんが学習会の担当の指導員になりました!!
　そして、幼なじみの心が入ってくれたから、二人でスタートしました!!普通に嬉しかったです。
　また、初めての県外でのフィールドワークで、高知県の長浜と愛媛県の宿毛結婚差別で亡くなった人のお墓参りに行ってきました。フィールドワークを通して、学習してきたことを劇にして、八月から十月までの約二ヶ月間きつい練習をし、無事に十月二十七日にウサノぴあの大ホールで発表しました!!千人近いお客さんからたくさんの拍手、温かい言葉をもらい忘れられない思い出になりました。そして、練習中めちゃ怒っていたT先生を本番で泣かすことができた時は、頑張ってよかったって正直思いました。
　また、「仲間の集い」の発表のための旗作りが終わったときに、同学年の色波が自ら参加してきてくれた時は、真面目に嬉しかったです。ほとんどの人が、遊びみたいな感じで聞いてくる人が多かったから、びっくりしました。
　そして、十二月に島根県の松江であった、全同教（全国人権同和教育研究協議会）に行ってきました。それは、小学校の時の学習会の担当の先生（O先生）が私のことについて発表するということで、大人の人たちが話し合って決めていました。その出発日がちょうど中学校の「仲間の集い」と被っていて、旗の紹介の順番を早めてもらってすぐに、出発したのを覚えています。しかも、それだけではなく期末テストが二～三日後に迫っていて行き帰りの電車の中で、勉強したのも覚えています。松江市についたとき、私は、人が多すぎることにびっくりしました。それに、勉強道具があったから、荷物が重くて最悪でした。あと子どもが私だけだったので、周りの大人の視線がめっちゃ痛かったです。「めっちゃこっち見てくるし」って思っていました。で、本題のO先生のレポート発表は、正直中学三年の時に小学校六年の話を聞いても、『そんなこと言った??』状態だったから覚えてないけど、覚えていたところに関しては、『そうだったな』って思いました。「特にどの部分が?」って聞かれても、今は覚えてないから答えられないけど。自分のことについて、発表すると言われたとき、まず、びっくりしました。なんで私の話?って感じです。まぁ、それだけ内容が印象深かったんだろうと思いました。だけど、自分のことを知ってもらえるって考えると、ちょっと、気持ちがすっきりしました。嫌だったという感情は無かったです。多分、そのレポートを発表するのがO先生だからかな?その時の小学校の先生の中で、O先生が一番私のこと理解してくれていたからかな?って思いました。もし、違う先生が発表していたとすると、嫌な感情でもあったのかな?って今は思います。やっぱ、初めて自分のことを発表されるってなると、自分のこと理解してくれている人がいいですよね。でも、本名とは、

違う名前でその名前が『さくら』とお母さんに買い物帰りに聞いて二人で笑いました。O先生のレポート発表が終わったら、ほかの先生が別の年で私のことをレポートで発表するんだけど、その中で、一番気に入った名前だったから良かったです！最後に一つH先生とは相性が合わず、毎回毎回会うたびに喧嘩（言い合い）していました。学習会の担当の先生と言い合いしたのは、H先生が初めてでした。まぁ。最後の中学の学習会のSt o ry は、こんな感じで終わりました。

四年目（高校一年生）

H先生からK先生に変わり、四年目がスタートしました!!

それと同時に高校生活がスタートして、高校で小学校が四年生まで同じで一緒に学んできた栄ちゃんと再会し、学習会にお誘いしました。

ついでに中学の時から親友のみーちゃんも一緒に参加してくれて、人数が増えたから良かったです。

また、中学生組と一緒にやることになりました!!八月には兵庫県の神戸市で、部落解放全国高校生集会（以下、全高）でレポート発表をしました!!高校生とか大人がめちゃ多くて、緊張しまくりでした。発表は上手く出来たつもりですが、質問を答えるときは、思った以上にたくさん出たのでびっくりしました。だけど、前もって何個か答えを考えてきていて、その答えが役に立ったから良かったです。けど、考えてない分の質問が来たときは、ちょっと困りました。でも、ちゃんと答えられたから良かったです。また、昔の話を聞かれたとき、その時の光景じゃないけどそんなのが思い浮かんで、泣きそうになったことを思い出しました。多分、その質問を答えていた時、声が潤んでいたと思います。最終的には、無事に終わって高知県連の人から「高知にフィールドワークに来てくれてありがとう」ってお礼を言われて嬉しかったです。発表して後悔なく、達成感を感じた気持ちになりました。

でも、そのレポートを書いたことにより、四年目の中で最も大きい事件が起きてしまいました。それは、姉妹のすれ違いが起きたことです。自分的には、もう、全高でレポートを発表したから、冊子みたいなの（大分県人権・部落差別解消教育研究会が発行している人権作文「ひかり」）にのっけてもいいかなって、妹が泣く前までは思っていました。だけど、妹が「嫌だ。」と言って、泣きだしてしまいました。だから、もう、自分が我慢すればいいんじゃないかなって、そしたら、妹が悲しむことは無いって、それ以来ずっと思っていました。お母さんだってたくさん悩んでいたし・・・。このレポートで、もう誰も悩んで苦しまないでほしいと思いました。でも、レポートの件は、決着をつけないといけないから、妹と一緒にお風呂に入ったときに、どうするって聞いたら「名前を隠すならいい」とか「でも載せてほしくない」とかいろいろ矛盾していたから、もうそれ以来レポートのことを聞かずに終わりました。そんな大きな事件もあったけど、この年は、なぜかめっちゃ充実した年だったと思います。

五年目（高校二年生）

担当の先生はそのままK先生で、五年目がスタートしました!!

五年目の時は、過去一でしんどかったです。いろいろ事件がおきるし・・・。

初めの方は、めっちゃ順調に進んでいたのに、どこかでルートが外れて、いろんな事件がおきていったんだろうって感じでした。

まず、二学期に栄ちゃんと喧嘩して、栄ちゃんの心境が分からず、抜けてもらって一時過ごしていました。事件は、それだけですむと思っていました。だけど、この栄ちゃんが抜けていた期間に、K先生のレポートで、自分の仮名の名前が嫌だ!!とか妹も何かが嫌だって言って、この年は、K先生のレポートでめちゃ考えることになりました。さらに、学校でのロングホームルーム（HRA）の人権学習で、めっちゃ悩んだ年になっていました。

まず、K先生のレポートを学習会で、初めて聞いたときは、自分の仮名前が嫌で、聞く気があまりありませんでした。次の学習会の時に、自分の意見を言って集会所の空気がどんよりしていたことがありました。自分的には、全高の時に自分のレポートで部落出身ということを発表したのに、先生のレポートの中で隠されるのが、本当に嫌でした。濁さずはっきり、名前で書いて隠さないでほしかったです。しかし、その意見を言ったにも関わらず、大人の人たちが、「もし何かあったらいけないから」ということで、結局は、名前が変わることなく、そのまま発表することになりました。その時は、コンタクトがとれるくらい泣いていました。その日の夜、K先生が家に来て「ちょっと話がしたい」って言われたけど、自分はもう話す気になれず、お母さんと話をしてもらいました。発表の日まで、全然先生と話していなかったから、めっちゃヤバい空気があって、K先生が本当に嫌いでした。発表の日は、私は本当に行く気がなかったのでギリギリまでバイトで気を休めて、会場に行くことになりました。着いてからも、先生とは話さず、ずっと終わるまで距離を置いていました。終わったときに、K先生が飴をくれたので、お礼を言って帰りました。

そして、学校の人権学習の方では、高校は、月に一回の朝の時間に人権学習、学期に一回HRAで人権の学習をしています。内容は、本当にそれぞれだったけど、気が付いたら人権学習がある日あるいは前日で、嫌な感情を抱いていました。その感情は、人権の学習をしていることに対しての嫌とかじゃなく、クラスのメンバーから出てくるマイナスの言葉に対して

の嫌な感情でした。それに、朝の人権学習は、感想をそれぞれ書いて終わりだったから、一人一人の気持ちは先生にしかわからないのが、もっと悔しかったです。

その年で、一番嫌な感情を抱いたのは、二学期の時でした。私にはとっては、本当に嫌な日になりました。勉強の内容は、ほとんどの人が一度は耳にするであろう部落の内容でした。最初は、本当に順調でした。しかし、『一番わかってほしいこと』という作文を読んだとき、感想を発表することになりました。その時、「別に部落出身とか伝えなくていいじゃん」とか「教える必要はないと思う」、「身近に部落出身の友だちがいないからわからない」っていう感想が出てきました。本当は、みんなと同じ部屋の空間に居るんだけど。私が、部落出身ってことは、学習会に参加しているメンバー、レポートを聞いたメンバーしか知らないからしょうがないけど、その感想を聞いて、私は親の許可とか他の人の許可とか気にせずに、部落出身ってこと言ってあげようって、ガチで思っていました。思っている間は他の意見がだされるんだけど、みーちゃんが反論してくれていたから、正直助かりました。その日の次くらいの放課後に、担任の先生に相談に乗ってもらいました。本当の気持ちを先生に伝えて、学習会の時にはいろんな先生と話すことになったけど、自分が伝えたかったことが言えたから良かったです。正直に言うと、この時クラスメートには、隠し事なんかしたくないって思っていたけど、部落出身っていうことを言うのは、自分だけじゃ決められないから、しょうがないって思いました。学校の人権の勉強で、部落って聞くといつかバレるのではないかって不安になるので、結構スッキリして優雅に学校生活を楽しみたいんだけど、こればっかりは、仕方ないって思っています。あと少しの辛抱ってとこかな。

だけど。この年では、めっちゃうれしいことがありました。それは、埼玉県の狭山市に行って狭山事件の勉強をしに行けたことです。これは、気づいたらずっと抱いていた夢でした。現地調査に行く前に、私は、どこかで本当に無実なのか疑っていた時期もありました。だけど、現地に行ったとき、狭山事件で逮捕されて無期懲役判決を受けた石川さんは、本当に無実だということが分かりました。

全高の時に、石川さんご夫婦に出会い話をしました。本当に無実になるといいなって思いました。それからは学習会とは別の日に集まり、この勉強してきたことをパワーポイントにしました。少しでも、多くのいろんな人に無実だっていうことを伝えていきたいです。

そして、この年は、狭山以外に、いろんな場所のフィールドワークに行けたので、良かったです。あと。なんと栄ちゃんが帰ってきました。いろんな人が学習会で栄ちゃんの話をするたびに皆は、栄ちゃんを待っているのかなって思ったから、またお誘いして再開することができました。やっぱり栄ちゃんがいるのといないのでは、全然違うと改めて思いました。うん。まぁ、なんか、あんなことやこんなことを考えた年でした。

で、この年の終盤は、コロナで強制終了しました。

そして最後になる、六年目（高校三年生）

K先生からR先生に変わって、最後の学習会がスタート!!

コロナでなかなか、スタートができなかったけどできるようになってからは、順調にできているから良かったです!!目標も「Ｓｔｏｒｙ」として、今回は一人でも欠けたら目標が達成できなくなるようにしているから、誰一人欠けずにゴールしたいと思いました。でも・・・。この目標は、結構難しいです。私の学校の三年生は、今年大事な時期です。だから、欠けないっていうのは、正直難しいと思います。就職に向けて勉強とか、就職するために普段の成績が今まで以上に大事だから、その勉強とか、お金稼ぎをしないといけないから、学習会と他の事を両立するのが難しくなります。私は、九月二十七日に入試があったから今後は、普通に勉強もできるからいいけど、他のメンバーは十月十六日～就職試験がスタートするから、大変だと感じました。だから、欠けることがあっても仕方ないって思いました。

学習会って簡単なものって思っている人がいると思います。けど、三年生になったら簡単ではないっていうことを皆に伝えたいです。だから、今のこの場に居ない何でも言えたみーちゃんもその理由で、居ません。結構、抜けるって聞いた時のダメージは大きかったです。みーちゃんは、三年生になってからは、参加が不定期になって居たので、もう少しで抜けるという報告が来る覚悟はしていました。だけど、実際本当に言われたとき、今までみーちゃんには、お世話になって居たからＬＩＮＥが来たときは、泣いてしまいました。みーちゃんからは、『学習会を抜けても遠くから見守る方に回る。』そう言ってくれたから、きっと私が悩んでいる時には、いつでも相談にのってくれると思います。Ｓｔｏｒｙの意味は変わるけど、一応今のメンバーでも成り立つようにはなっているから、残りのメンバーで無事に終わりたいと思っています。

そういえば、なんと妹にも理解してもらえたのかわかんないけど、前まで悩んでいた例の全高で発表したレポートを妹が「出してもいいよ」って言ってくれました。また、妹も「自分のレポートを出してほしい」とまで言うようになり正直、妹も自分と同じくらい学習できるようになったのかなって思ったけど、自分の気持ちを言ってくれたこと本当に良かったです。これからは、こんな感じで今までの自分のＳｔｏｒｙを話すことがなくなるけど、妹に負けないように頑張りたいです。

そして、九月にあった県奨の話をします。今回の県奨はとっても楽しかっ

たです。一日目の始めは、狭山事件のビラ配りを「自分たちで考えよう」ってことで、大野の親友のあっきーと妹の三人と先生と会話しながら楽しく考えていました。とても一人ひとりが個性的なビラが今回は出来たと私は思っています。夕食の後は、女子部屋に全員（学生）が集まって恒例の罰ゲーム付きでトランプをしたり、人狼ゲームをしたりして遊びました。

そして、今回の最後の役割を果たすレポート討議の時に事件は起きました。それは、大野の女子のレポートと妹のレポートまでは順調に進んでいました。そして、自分の出番が来ました。レポートの内容は、少し内容を変えていますがこのレポートを発表しました。読むときは、所々当時の感情が思い浮かんで声が潤んでいたけど、泣くことはなく終わりました。でも、質問に答えるときに事件は起きました。妹は私が一番聞かないでほしかった質問を私じゃなく大人の人にしてしまいました。妹が聞いた質問の内容は「姉妹が文集に載せるか載せないかですれ違いしたときのレポートで悩んでいた時、あの場に居なかった大人の人はもし、その場に居たとするとどうしていたか？」という質問の内容です。私は、あの時多くの人を悩ませてしまったことに後悔していたのに、また悩ませてしまうことに申し訳なさが感じていました。だから、その質問にいろんな人が答えている間は涙が止まりませんでした。そのあとの質問には、何とか無事に答えることができたけど、妹の質問内容で時間が少なくなったので、他のことで質問をしたかった人には申し訳ないとずっと思っていました。

レポート発表が終わってレポート討議が終わった後、支援学校の先生が近づいてきて、いろいろ励ましてもらえたけど、ずっと泣いていたのであまり内容が入ってきていませんでした。だけど、励ましてくれる人などが多く居て正直嬉しかったです。あの時はコンタクトがとれそうなくらい泣いて酸欠になり、倒れるかと思いました。その日の夜は、深夜の一時半まで遊んで二時過ぎまで起きていたので半分寝不足だったけど、楽しく過ごせたので良かったです。その日の夜はバイトだったので帰ってからは、バイトに行くまでずっと寝ていました。まぁ、そんなことはいいとして今回の県奨は本当に、充実した一泊二日になりました。大野の高校生とあんなに遊んだのは初めてでした。

そして、最後にいろいろ学習している仲間たちに（大人を含めて）メッセージを送ります。今まで学習してきて、自分で学んだって思うことは生かして、いろんな場所で活躍してほしいです。そして、自分に自信が持てる人間になってほしいです。そしたら、きっと毎日が気楽に過ごせると思います！私は、高校卒業した後は、大分市内の専門学校に合格したのでそこに進学します。二年後には社会人になるので社会人になるまでに自分の気持ちを率直に、そして誰にでもフレンドリーに話せる人になりたいです。なんでかというと、フレンドリーだと自分の素が出せて、表裏の自分が見せられるからです。だから、今まで勉強してきたことが役に立つように頑張りたいです。

そして、今年は過去一に楽しい学習会にしたいです。そして、たくさん写真が撮れるような場所に行って、三月の最後の学習会で私から皆にお礼を込めたものが作りたいと思います。今は、コロナで限られたことしか出来ないけど、限られた可能性、奇跡を信じて、これからも前に進んでいきたいと思います。

【おまけ】私が思うＳｔｏｒｙのテーマの理由＋Ｓｔｏｒｙの文字に隠された二つの意味

・最後の学習会になるメンバーがいるから、最後に皆で最高の思い出を作って卒業したい。

＋Ｓｔｏｒｙの文字に隠された意味。

・残されたメンバーだけの場合…

Ｓｔｏｒｙの『Ｓ』：残されたメンバーの名字に入っているそれぞれの文字。↓『Ｓｏｇａ、Ｓａｔｏ、Ｓａｔｏ、Ｙａｍａｓｕｅ』

Ｓｔｏｒｙの『ｔ』：Ｔｓｕｋｕｓｈｉの『ｔ』。

Ｓｔｏｒｙの『ｏ』：Ｓｏｇａの『ｏ』。

Ｓｔｏｒｙの『ｒ』：Ｉｒｏｈａの『ｒ』。

Ｓｔｏｒｙの『ｙ』：Ｙａｍａｓｕｅの『ｙ』。

・抜けだけど、居ると考えた時の場合…

Ｓｔｏｒｙの『Ｓ』：Ｓｏｇａの『Ｓ』。

Ｓｔｏｒｙの『ｔ』：変わらず、Ｔｓｕｋｕｓｈｉの『ｔ』。

Ｓｔｏｒｙの『ｏ』：文字の真ん中＝全体を見守ってくれるだろうから、Ｍｉｈｉｒｏの『ｏ』。

Ｓｔｏｒｙの『ｒ』：上のとは変わってないけど最初のだと変わっている、Ｉｒｏｈａの『ｒ』

Ｓｔｏｒｙの『ｙ』：変わらず、Ｙａｍａｓｕｅの『ｙ』。

補足１：【学習会】部落差別をはじめとする様々な人権について学習している学校外の学習会のこと

補足２：【県奨】年一回開催する部落解放大分県高校生・中学生交流集会のことを略して県奨と言っている。

補足３：【友の会】部落解放大分県高校生・中学生友の会のこと。大分県内の部落の中学生・高校生とその仲間が中心になり、年に数回集まり交流学習をする会

当事者として考えたこと

中津市　高等学校　三年
中村　彩花

みなさんは、「ＬＧＢＴ」という言葉を知っていますか。ＬＧＢＴとは「レズビアン」「ゲイ」「バイセクシュアル」「トランスジェンダー」という４つの性的マイノリティーの総称です。私はこの中のトランスジェンダーの当事者です。トランスジェンダーとは、生まれた時の性別と自分の心で感じている性別とで違和感を感じている人の事を言います。私の生まれた性別は女性ですが、自分の心の中で感じている性別は男性です。だから、本当は男性として生活をしたいのですが、それができないのが現実です。

まず始めに自分が着る服の問題です。私はスカートやワンピースなどの女の子が着るような服は好きではありませんし、とても違和感を感じて嫌です。学校の制服は特に嫌いです。なぜなら、自分がどんなに学ランが着たいと思っていても男性と女性の区別がはっきりしている以上、自分が学ランを着ることはできません。私は中学と高校で２回学ランを着ることができなくて、すごく落ち込みました。

それと、もうひとつ、友だちから言われたある一言でとても傷つきました。それは「彩ちゃんと遊ぶと、周りの大人たちから彼氏だと間違えられて嫌。」というものでした。私は普段、自分がかっこいいと思う服しか着ません。パッと見ると、自分が女性だと思われることはありません。だから、友だちがそう言ったのでしょう。

次に、彼氏や彼女の問題です。思春期、中学や高校になると彼氏や彼女を作る人が増えます。すると、クラスから聞こえてくるのは

「彼氏がいるのか？」
「彼女がいるのか？」

という会話です。私も友だちから

「彼氏はいるか？」

と聞かれた事があります。私は

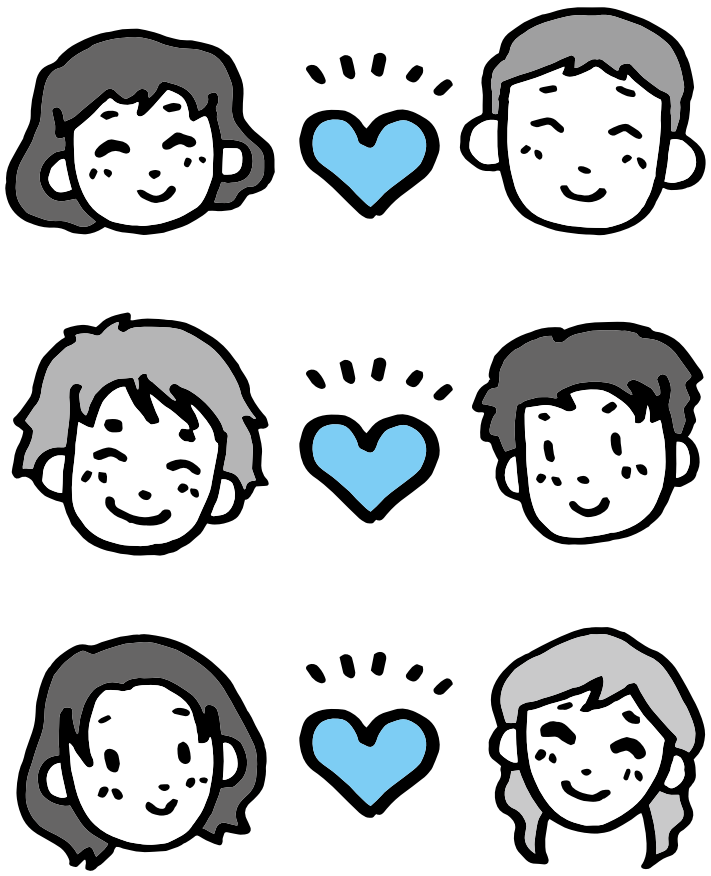
「そういうの考えたことがない。」

と答えました。なぜなら、私は男性と女性、どちらとも付き合った事があるからです。私の恋愛対象は、男性です。でも私はそういう彼氏や彼女という考え方は、良くないと思っています。自分がどちらの性別の人と付き合うのかは、人それぞれです。自分が心の底から好きだと思える人と付き合ったらよいと思います。私が今付き合っている人は、女性です。告白されて付き合い始めましたが、最初はとても悩んだりしたけれど、今はとても良いパートナーだなと思っています。

私の生活では日常的に不便なところはたくさんあります。差別される事もあって、悩んで苦しんで、それでも解決できない事が多いです。でも少し支えてくれる人が居れば、生きていられると実感する事ができました。

私はもっと沢山の人がＬＧＢＴについて理解を深めていけば、もっと暮らしやすくなる環境になると思ってい

ます。



出会いと別れで学んだ今の自分

日田市　高等学校　四年

武内　陸斗

私には大好きな先生がいました。それは保健室の先生です。先生は、いつもやさしい笑顔で話しかけてくれたり、私の話を聞いてくれたりしました。体調も悪くないのに、給食のあとや授業が終わるたびに保健室に向かうのが日課になっていました。

保健室に行くと、先生はいつも「いらっしゃい」、「おかえり」と笑顔で迎えてくれました。十五歳のころから正社員として働いている私は、どんなにきつくても、どんなに腹が立っていても、先生の声を聞くと不思議と笑顔になれました。

二年生の十二月、そんな先生が体調不良で学校を休むようになりました。先生の笑顔どころか、保健室の明かりさえ消えて真っ暗でした。「先生は、いつ帰って来られるのだろう…」と不安でしたが、三年生の四月、新しい保健室の先生が紹介され、先生はもう帰って来られないんだと、落ちこんでいました。

ところが、半年後の二学期から、先生が少しずつ出られるようになりました。先生に会えると思うと、たまらなくうれしかったのですが、久しぶりに話そうとしたらとても緊張しました。でも先生の方から「おつかれさま。久しぶりやね。」といつもの笑顔で話しかけてくれました。それから先生は来られない日もありましたが、来られた日には、かならず「おつかれさま」と笑顔で声をかけてくれました。私はまた保健室に行けるようになったことがうれしかった。何気ない会話ができる、ただそれだけで幸せだったのです。

それから少したったある日、授業が終わっていつものように保健室で話していたら、「今日は体調がすぐれないから帰るね。ごめんね。」と言われたので、「うん、また来れる時は来てね。バイバイ。」と手をふると、先生は笑顔で、「りく、がんばってね。バイバイ。」と言ってくれました。先生の「がんばってね」というひと言が聞きたくて、先生がまた学校に来られるのを楽しみに待っていました。

毎日毎日、「今日は来てるかな?」と、わくわくしながら学校へ行きました。けれど、自動車学校へ行くようになった時も、免許が取れて車を手に入れた時も、そして私が生徒会長になった時も、先生の姿はありませんで

した。いつか絶対、自分の口で報告したいと思っていました。

でも、その願いがかなうことはありませんでした。

二〇一八年の二月二日、土曜日の仕事帰りのこと。担任の先生から届いたメール。「昨夜お亡くなりになりました。」突然すぎて、言葉もありません…。「葬儀場が遠いので無理しなくてもよいです。」とありましたが、「必ず行きます。」と担任の先生に電話しました。すると、「陸斗さんに弔辞をお願いしたい。」と言われ、私は正直悩みました。でもその時、不思議と保健の先生との思い出が頭に浮かんできて、弔辞を読む決心をしました。

葬儀では泣きたくない。笑顔でお別れしたい。そう思っていましたが、弔辞を読み始めると涙があふれ、ふるえる声で読み上げました。「これで本当に最後のお別れなんだ…」涙が止まりませんでした。

保健の先生との「出会いと別れ」があったから、私は笑顔の大切さ、困ったときに頼れる人のいる幸せとそのありがたさを学ぶことができました。そしてここのみんながいてくれたから、私は今日まで成長できたと信じています。

私は今、生徒会長を務めています。そのきっかけは、先生の笑顔が私を笑顔にしてくれたように、「次は自分が周りの人を笑顔にして、明るい学校にしたい」と思ったからです。半年後の生徒会役員選挙のとき、ある先生に「あなたが会長になって、学校が明るくなったと思う。」と言われ、「こんな自分でも、人の役に立っているのかな…。よし、もう一度生徒会で頑張ってみよう」と思い、二度目の生徒会長に立候補しました。これも、先生があのやさしい笑顔で背中を押してくれたのだと思います。

調理員さんたちが作ってくれる毎日の給食が、私の定時制での一日を元気にしてくれます。亡くなった先生をはじめ、すべての先生方、定時制の仲間、そして何よりいつもそばで私を支えてくれる大切な人がいるからこそ、きつくても、苦しくても、今日までの四年間を楽しくすごすことができています。

私を支えてくれるみんなに感謝しています。今日まで本当にありがとう！

卒業まであと少し。これからもよろしくお願いします！

みんながいるから私は笑顔になれる。そして以前の私とはちがう、やさしい気持ちで人に接することができるようになった今の私がここにいます。

定時制のみんな、最高です!!　みんなもずっと笑顔でいてください。私は、出会いと別れを乗り越えて、もっともっと成長します。亡くなった先生に、胸張って報告できるような人間になります。私は決して一人じゃない。

親友K

中津市　高等学校　四年
石丸　優莉

私は中学の頃ひどい人見知りでした。そのせいで友だちは出来ず、入学してから二年生の途中までいつも独りぼっちでした。私は人見知りのこともあってか、軽いいじめを受けていました。毎日が本当に苦痛でした。そんな仲間外れの私にKは笑顔で話しかけてくれたのです。Kと私はみるみる仲良くなっていきました。それから、私の人生は百八十度変わりました。私は心の底からうれしいという感情が湧き出してきました。生きている実感がありました。

三年になり、進路希望のことを話していると、Kが

「私、定時制に行くから」

と言い出しました。私が

「なんで定時制なの？」

と理由を聞くと

「先生たちから、お前は全日制を受けても無理だ。定時制も厳しいって言われて頭にきて、それでみんなを見返してやろうと思って決めたんよ。アルバイトしながら高校行けるなんて最高だしね。」

と目をキラキラ輝かせて話してくれました。

私はまだその時どの高校に行きたいとか、高校で何がしたいとか、明確なものが何もなかったので、高校に進学する目的を持っているKをとてもうらやましく思いました。

やがて、私も流されるまま受験する高校が決まりました。正直、不安しかありませんでした。私の不安な心が伝わったのか、Kが

「大丈夫？」

と聞いてきました。その瞬間、涙があふれて止まらなくなりました。

「本当に大丈夫なの？」

全然大丈夫じゃありませんでした。決めたといっても先生たちが無理やりに決めたといっても過言ではないのです。私の意思などそこには全くありませんでした。

私の不安をKに伝えたら、

「優莉は人見知りが激しいし、大人数も苦手だから、定時制がぴったりだと思うよ。クラスの人数もそこまでいないだろうし、いいんじゃない？」

と言ってくれました。私は数日間悩んだ末、Kと同じ定時制高校に行こうと決心しました。

そのことを担任や両親に言うと、みんな猛反対です。

「定時制なんかお前に続くわけない。今からでも考え直

せ。」
とか、
「Kと一緒の高校？無理やり言われたんじゃないか。」
とも言われました。
でも、私はみんなの反対を押し切って定時制を受けることを決めました。親や先生に初めて自分の意見をちゃんと言った気がしました。もう迷いはありませんでした。
両親も最後は私の定時制受験を応援してくれたので、その期待を裏切らないように受験勉強にもいっそう力が入りました。
そして、猛勉強のかいもあり、二人とも無事に合格することができました。私は、怖い先輩たちばっかりなんだろうなぁと思っていたけど、全然そんなことなくて、みんな優しくて内心びっくりしました。それと同時に、楽しい高校生活になりそうだなぁとも思いました。新しいことに挑戦しようとワクワクしている自分がいることに驚きもしました。
高校に入学してからは、初めてのアルバイトも始めました。わからないことも一杯あったけど、職場の人はみんな優しい人ばかりで楽しかったです。でもやっぱり楽しいことばかりは続かなくて、職場で失敗しまくりで怒られたこともあります。そのイライラを関係のないKにぶつけてしまって、ケンカをしたときもありました。でも、ケンカしてもKは、
「今日は職場ではどうだった？大丈夫だった？」
と聞いてきてくれます。
「優莉なら大丈夫。やれるよ。無理しない程度にがんばって。」
と励ましてもくれました。私はその言葉にどんなに救われたかわかりません。
私はKがいてくれたおかげですごく変われたと思います。人見知りが激しかった私が、高校生になり、誰とでも会話できるようになりました。おかげで友達も増えました。職場でもコミュニケーションが取れるようになってきたので、何と責任者にも抜擢されました。毎日、パートのおばちゃんたちに気を使いながらも、少しずつリーダーシップを発揮できていると思います。これも全部Kのおかげです。
私は定時制高校に入学して本当に良かったです。中学時代の私からは、考えられないほど積極的にもなりました。今年の夏は、学校行事の紹介で地元のＦＭラジオに生徒代表で生出演もしました。新聞のインタビューにも堂々と答えることができました。日々の生活の中で、大きく成長しているのを実感できます。私に定時制高校という選択肢を教えてくれたKには、本当に感謝してもしきれないくらいです。
Kと一緒に学んだ大切な日々は、私の一生の宝物です。卒業しても相変わらず私の隣にはKがいてくれるといいな。
K、ありがとう。そしてこれからもよろしくね。

あとがき

この人権作文集「ひかり」は、本来子どもたちとともに考えあっていくことを目的に編集され、日常的に活用されることを期待して作成されました。

子どもたちをとりまく社会が、ますます厳しくなっている現実があります。その社会の中で、子どもたちが、様々なことを感じたり、新しい気づきを生み出したりして、自分の言葉で綴っています。その思いを受けとめてほしいと思います。たくさんの子どもたちがこの作文集と出会うことを願っています。

また、私たちも子どもたちの思いを知り、日常の生活の中で、具体的な事実を通して、様々な矛盾や不合理、差別を見抜き、憤り、これから解決しようとする子どもたちの姿に学んでいきたいと思います。

残念ながら、応募された作品のすべてを掲載することはできませんでしたが、作文に取り組んだ子どもたちや、その指導に当たられた教職員、選定いただいた各地の担当者や編集委員など、多くの方々に厚くお礼申し上げます。

二〇二一年三月

公益社団法人

大分県人権・部落差別解消教育研究協議会

表紙および作文内の絵や作品は大分大学教育学部附属特別支援学校生徒さんのものです

表紙および作文内の絵や作品は大分大学教育学部附属特別支援学校生徒さんのものです